

知られざる国 バヌアツの素顔

白鳥貞夫 (2004-06 バヌアツ 経営管理)

最初にお断りしなければならないが、私がバヌアツでJICAシニア海外ボランティア (SV) を務めたのは2004年10月からの2年間で、その後同国を訪れていない。入手できる最新情報も限られ、ここでご紹介するバヌアツ事情は15年前の小生の体験に基づいている。

この15年間でバヌアツの人口は21万から30万になり、首都ポートビラも4万から6万に増えた。Googleで首都の画像を検索すると、新しい建物が増えたが、市街の様子はそれ程変わっていない。一人あたりGDPも約2割増えたが、最貧国であることに変わりなく (世界199位)、15年前の経験談は今も通用しそうな気がする。



ポートビラの全景

バヌアツを知る人は少ない。私もSVに応募するまでバヌアツという国の存在すら知らず、現地に行って初めて知ったことが多い。中でも意外だったのは、太平洋戦争での日本との「知られざる因縁」で、旧日本軍が連合軍 (実質米軍) に惨敗を喫したガダルカナル戦の米軍側の基地と司令部がバヌアツだったことだ。ポートビラには不思議な地名がある。町外れの丘は「ナバツ」、「ナンバツリ」、郊外に「ビバリーヒルズ」もある。ナンバツ、ナンバツリは No.2、No.3 のバヌアツ訛りで、米軍の第2、第3レーダー基地があった場所、ビバリーヒルズには米軍の病院があった。



ポートビラのメインストリート。正面の青い建物が小生が居住したホテル

真珠湾開戦から4ヵ月後の1942年3月29日、米軍は10万の大部隊を首都ポートビラ近くのメレ湾に上陸させた。南下する日本軍からオーストラリアとニュージーランドを防衛する作戦だったとされる。米軍は3ヵ月でエファテ島を要塞化し、近くの島々にも部隊を展開して日本軍の襲来に備えたが、日本軍はバヌアツの北600kmのソロモン諸島のガダルカナル島に進出したところで、バヌアツから出撃した米軍によって殲滅された。日本軍は3万2千の兵を投入して1万6千を失い、その大半が餓死者だった。日本軍はこれを教訓とせず、その後も補給を無視して各地で無残な戦闘を繰り返した。



メレ湾に上陸する連合軍

米軍の痕跡は地名だけではない。首都の空港 Bauerfield International Airport は1942年に米軍が急造した飛行場の再利用で、今も大型機は飛べない。Bauer はこの飛行場から出撃し、日本軍機を11機を撃墜して戦死した英雄パイロットで、同大尉を顕彰する遺影が、日本がODAで無償供与した国際線ターミナルに掲げられている。気付く人は少ないが、敗戦の記憶が残る我々の世代には、複雑な感慨が湧く。

ついでに、空港ターミナルの表示が「Aeroport de Port Vila Bauerfield International Airport」と仏語 + 英語の一体表示になっていることに注目いただきたい。この国の歴史にフランスと英国が複雑に絡みあっていることを象徴しているからだ。



ポートビラ国際空港ターミナル



パウワー大尉

戦前・戦中派の日本人がバヌアツで皮肉を感じる事は他にもある。日本から訪れる年間数百人の観光客の大半がダイバーで、彼等が聖地とするサント島の「百万ドル海岸」は、戦勝した米軍が撤収する際に兵器や装備を海中に投棄した場所で、それが漁礁になって絶好のダイビングスポットになったのだが、日本が米国と戦争して敗けたことさえ知らぬダイバーには、何の感慨も湧かないようだ。

ちなみに、バヌアツは「我等の土地」を意味する。この国がバヌアツを名乗るようになったのは1980年7月の独立以降で、それ以前は英国の航海者トーマス・クックが命名した「ニュー・ヘブリデス」が使われていたが、本稿では独立前もバヌアツと呼ぶことにする。

独立の際に制定された国旗は、力と神聖のシンボルである野豚の血を表す赤と自然の豊かさを象徴する緑を配し、肌の黒とキリスト教を示す黄色でバヌアツ列島のY字型配列を描き、富と繁栄を象徴する野豚の環状の牙と平和を表すナメレの葉を記した。



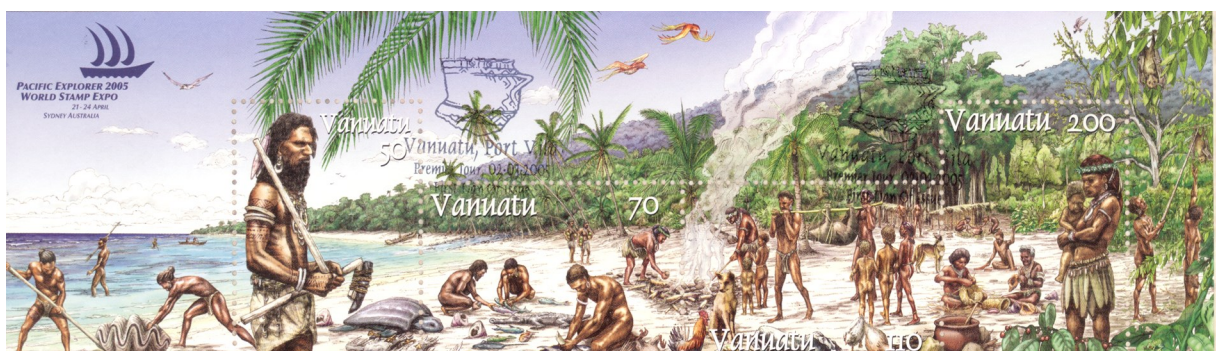
バヌアツの地勢： バヌアツ列島は南緯12度から南緯20度に位置し、南北1,200 kmに伸びる86の列島から成り、64の島々に人が住む（人口数百人の島が多い）。環太平洋火山帯上にあり、土地が毎年2cm上昇するので、サンゴ礁の島嶼国とは異なり、地球温暖化による海面上昇で国土を失う恐れは無いが、そのかわり、数年に一度、火山の爆発や被害を伴う地震に見舞われる。

国の総面積は12千平方キロで、新潟県に匹敵する。首都のあるエファテ島は3番目に大きい、佐渡島ほどの大きさしかない。どの島も若い火山地形で、海岸から急峻な山稜が立ち上がり、人が居住できる土地は海岸の狭い入り江に限られ、農耕が可能な土地は少ない。



首都の気温は、夏季（11月～3月）が28～32度、冬季（5月～8月）が20～28度で、夏季の日中は太陽が頭上に輝いて厳しい暑さになるが、年間を通して東から貿易風が吹くので比較的過ごしやすく、一般民家はもちろん、オフィスやホテルも冷房のないところが多い。年間を通じて降雨があり、サイクロン（南半球の台風）が数年に1度襲来して被害をもたらす。

バヌアツの歴史： 南西太平洋地域に分布するメラネシア人（「黒い人」の意）は蒙古系とアフリカの黒人系の混血と考えられ、インドシナ半島からフィリピン、パプア・ニューギニア、ソロモン諸島にカヌーで渡洋し、紀元前1,200年頃にバヌアツの島々に渡来した。遺跡から日本の縄文土器とよく似た土器が発掘され、縄文人と同様に魚介類や野生の動植物を採取して生活していたと考えられる。今も離島の住民の自給自足の暮らしは、その頃とあまり変わらないように見える。（下はバヌアツの記念切手に描かれた先住民の暮らし）



渡来した人々は海岸の入り江に定住して集落を作ったが、火山地形の断崖や濃密な熱帯雨林に阻まれて集落間の交流が乏しく、地域的な言語や文化が小部族単位で継承され続け、現在も集落固有の言語が110以上残っている。このため部族間の抗争が激しく、敗れた敵将を食う食人の風習（カニバリズム）が盛んに行われ、1969年にマレクラ島で最後の食人が行われた記録がある。

ヨーロッパ人の入植は、1825年にアイルランド人貿易商がエロマンガ島で香木の白檀を発見し、採取者が殺到したことに始まる。本格的な入植は1854年に始まった牧畜業によるもので、続いて米国の南北戦争で高騰した綿花をオーストラリア人が栽培し始めたが、戦争終結で価格が暴落し、ヤシ油の採取やココア栽培に転じた。これらの農産物は今も輸出産品の中核だが、国際価格が不安定で基幹産業にはなり難い。

白人が欧州から持ち込んだ様々な疫病が、免疫力を持たない島民を襲った。19世紀初頭に1百万人いたと推定される先住民は19世紀末に10万人まで激減し、1935年の調査ではわずか4万人だった。同様の歴史は他の南太平洋の島嶼国や南米のインカ民族などにも共通し、先住民には疫病に対する恐怖心が強く残る。

1863年頃から「黒鳥狩り」（Black Birding）が行われた。アフリカでの暴力的な奴隷狩りとは異なるが、先住民を騙して連れ出し、強制労働に就かせたことを指す。フィジーやオーストラリアのサトウキビ栽培やニューカレドニアのニッケル採掘の労働力として、3ヶ月の季節労働と偽り、実際は数年間の重労働を課した。対価にガラクタを与え、帰国させる時も適当な島に放置するような蛮行が横行した。法的に禁止されたのは1901年で、この禁止に長老教会の牧師達が熱心に動いたことが、キリスト教布教の基盤になったと思われる。

1853年に隣のニューカレドニアがフランス領になり、バヌアツの島々にもフランス人入植者が急増した。バヌアツは天然資源がなく住民も少ないため、植民地としての魅力が薄く、英国は植民地経営にあまり関心を持たなかつ

たが、フランス人のヒギンソンが先住民の土地の買い上げ、1882年には利用可能な土地の55%を獲得するに至ったため、仏・英の勢力争いが表面化した。20世紀に入ってドイツがこの地域に進出を図ったため、英仏は既得権益を守るべく1906年に共同統治に合意し、この体制が1980年の独立まで続いた。当時の入植者はフランス人2,000人、英国人1,000人といわれる。

協同統治は「コンドミニウム」と呼ばれたが、趣旨を理解できない先住民は、フランスの大統領と英国の女王が結婚して共同統治になったと信じていた。両国の機関が並立して勝手に統治する粗雑な仕組みで、ポートビラには警察と裁判所が2系統あり、フランス刑務所の方がメシが美味しいので、どうせ捕まるならフランス警察に、といった冗談めいた話が伝わっている。



この頃から英国が労働力として中国人を移民させ、フランスもベトナム人を導入した。現在のバヌアツの人口は95%がメラネシア系先住民、4%が中国・ベトナム系、1%が白人で構成される。植民地経営で定住した白人の子孫は少数で、現在バヌアツに居住する白人の大半は、近年になってオーストラリアやニューカレドニアから移住した人たちで、バヌアツの数字に表れる経済活動の大半は、これら新移住者のビジネスに拠る。

太平洋戦争で米軍がバヌアツに基地を置いたことは冒頭でふれた。往年の名作ミュージカルで映画化もされた「南太平洋」は作者のミッチナーがバヌアツ駐留米軍をモデルに書いたもので、豊かな物資とアメリカ人らしい解放的な軍隊の様子は映画のとおりだったらしい。米軍は徴用した先住民に賃金を払い、物資を惜し気なく与え、医療施設を開放するなど、先住民に神の軍隊のような印象を残し、米軍の再来を祈る新興宗教の「フラム教」も生まれたが、米国は終戦直後に完全撤退し、その後の米国のバヌアツへの関与は殆ど見られない。

第二次大戦後に周辺の島嶼小国が独立する中で、バヌアツは1980年まで英仏の共同統治下で過ごした。小島に小部族が分散・孤立して暮らしてきたバヌアツ人に「国民」の意識が乏しく、英仏が夫々の思惑で部族を囲い込んだこともあり、独立運動は盛り上がりを見せていたが、1971年に英国国教会牧師のリニが国民党を設立して独立を求め、英国は国際的な体面もあってこれを支持した。これに対してフランスは支配下の島々の自治権を維持するべく、反リニ派を後押しした。



初代首相 リニ

1979年の第一回選挙でリニが初代首相に選ばれ、1980年7月30日に独立が宣言された。その後も分離独立派が不穏な動きを続けたが、新政府はパプア・ニューギニア軍の派遣を要請して鎮圧した。近年は平穏に見えるが、部族を背景とする小党乱立で不安定な政治が続き、一発触発の危険が消えたわけではない。

独立後は英国を引き継いだオーストラリアが政治・経済面で影響力を保つ一方、フランスもEU代表部を通じて影響力の維持を図り、今も何かにつけて有形無形のさや当てが演じられている。近年は中国が支援を強化し、国会議事堂などの大型無償供与だけでなく、大使館のスタッフが集落を回ってきめこまかな援助を提供し、我々が中国人と間違えられて村人に礼を言われたりすることがある。ちなみにバヌアツに大使館を置く国はオーストラリアと中国で、他にEUやニュージーランドは代表部を置く。日本はバヌアツをフィジー大使館の管轄下に置き、JICA現地事務所が日本代表のような役割を務めている（2006年当時）。

伝統的社会構造と文化： 現在も約110の部族で夫々のチーフ（酋長）が強い支配力を持っている。チーフは世襲ではなく、部族内の上位の家柄の中から、実力、人望を認められた者が選ばれる。都市圏に移住した人達にも出身部族毎の結束が見られ、重要な決定は出身部族のチーフの裁定を仰ぐことが多いと言われる。独立後の民主的政治制度の下でも、大統領の選任や国の伝統文化にかかわる事項については、酋長間で選ばれた大酋長会議に諮問される。



大酋長会議場

宗教： キリスト教宣教師が最初に渡来したのは1839年で、当初は原住民に捕らえられて食われた宣教師もいて、先陣としてポリネシア系宣教師が送り込まれたと言われる。現在は国民の80%がキリスト教徒で、約半数をプロテスタントの長老教会派が占め、英国国教会派が20%、カトリックが20%である。長老教会は先住民の伝統文化を厳しく禁じたが、英国国教会とカトリックは比較的寛容と言われる。



村の長老派教会

熱心な信者が多く、休日に教会に礼拝に出かける習慣が定着している。バヌアツ人は優れた音感と声を持ち、教会では現地風アレンジされた賛美歌やゴスペルが盛んに歌われている。食事前の祈りは言うまでもなく、仕事の集まりでも、開会と閉会時に指名されたリーダーと共に祈りを捧げる習慣がある。

キリスト教化で原始宗教は表面的には衰退したが、今も先祖霊の崇拝が一般的で、悪霊払い（Black Magic）が色濃く残る地域や、原始宗教とキリスト教が習合した宗派が流布する地域もある。タンナ島南部では、この地に漂着したフラムと名乗る白人が「ヨーロッパ人が退散して代わりに巨大な富が訪れる」と予言し、その直後に米軍が駐留して住民に大量の物資や恩恵を施したことから、フラムを預言者に見立て、伝統的な踊りで再降臨を祈るフラム教が起き、現在も盛んに行われている。



米軍隊の行進を模したフラム教の祭り

政治形態： 一院制の議会制民主主義で、議会で選出された首相と閣僚が行政を行う。元首の大統領は議会と大酋長会議によって選ばれる。バヌアツを構成する6つの州に自治権が認められているが、州の財政基盤が乏しく、独立行政は名目的と言わざるをえない。主要政党が8党あり、絶対多数政党がないため常に不安定な連立内閣を余儀なくされ、1年前後で崩壊することが多い。

バヌアツの国情： 一人当たりGDPは先進国の10分の1以下で最貧国の一つに数えられるが、飢餓を伴う悲惨な状況があるわけではない。天然の食料に恵まれ、原始共同体の互助の伝統が残り、おカネやモノが無くても不自由なく楽しく生きてゆけるので、縄文時代さながらの暮らしを惨めとは思っていない。浮世離れた「南太平洋の最後の楽園」の一面は、2006年7月に発表されて話題を呼んだ「幸福度指数」で世界トップにランクされたことにも表れている。



チーフが運営するコンビニ。電池、缶詰、医薬品など必需品が買える

バヌアツ人の幸福感には情報がなくとも寄与している。バヌアツにはテレビも新聞も週刊誌もない（白人コミュニティ向けの週刊新聞はある）。自分と比べる情報がなければ欲求不満に陥らず、広告がなければモノが欲しくなることもない。都市部（首都とサント島ルーガンビル）を除けば自給自足と物々交換で生活が成り立っていたが、義務教育の普及で村部でも親の現金収入が不可欠になり（国家財政が乏しく義務教育の費用の一部を父兄が負担）、農産物の現金化や出稼ぎを余儀なくされ、貨幣経済の浸透を促すことになった。集落によってはエコツーリズムの観光収入で学校を運営し、優秀な子供を高校に入れる費用を集落で共同負担している。

義務養育は2005年に6年から8年に延長されたが、教員と校舎の手当てが全国に及ぶのは数年先になる。授業は英語がフランス語で行われ、教材はオーストラリアやフランスが供与した中古教科書が使用される。高校には先進国からの派遣教師が多く、高校生の語学力、学力はかなり高いが、能力を活かす職場は限られている。

	都市部	村部	全国
人口分布	23% (5万人)	77% (16万人)	21万人
就学6年未満	49%	81%	72%
高校卒業	10.8%	1.9%	3.9%
大学卒以上	2.8%	0.7%	1.4%
主たる職業	公務員 白人の下働き 露店販売、 タクシー運転手	自給自足農漁業 エコツーリズム パン製造 出稼ぎ	
電気のある家庭	60%	5%	19%
水道のある家庭	47%	7%	17%
電話のある家庭	17%	2%	5.8%



村の小学校



仏系高校の生徒たち

バヌアツの近代化を阻害している要因に電力の欠如がある。小島に小集落が点在するバヌアツでは送電が困難で、商用電力が24時間得られるのは首都ポートビラと第2の都市のサント島ルーガンビルに限られる。電力がなければモダンな生活が出来ないだけでなく、粗放農業以外の産業は困難で、漁業も冷凍冷蔵なしでは成り立たない。太陽光、風力、潮力など自然エネルギー利用の発電も、巨額の援助なしでは始まらない。

バヌアツ商工会議所での仕事

JICAシニアボランティア（SV）は派遣要請のあった職場に配属され、先方の担当者（カウンターパート）と共同で業務にあたる。小生の配属先のポートビラ商工会議所はバヌアツ商工会議所と通称されていた。商工会議所は一般に地域の商工業者で組織された会員制の経済団体だが、バヌアツ商工会議所は通商省の交付金で運営される半官半民の組織で、先住民の事業支援を目的として1995年に設立され、10年以内に経営研修プログラムを提供することが義務付けられていた。その期限が残り1年に迫り、支援要員として日本人の経営経験者の派遣をJICAに要請した。その公募に小生が応募して採用され、2004年10月に赴任し、オリエンテーションと現地語研修の後、小生にとって想定外が連続の2年間の活動が始まった。



バヌアツ商工会議所（職場）

経営研修を企画するには、先ず対象となる会員の経営の実態を知らねばならないが、5,500人居るといふ会員の名簿が会議所に無かった。バヌアツには会社法や事業税制がなく（タックスヘブン）、商売をしたい者は毎年度初めに通商省に事業登録（Business Registration）して免許税を払う。税額は年商額の自己申告で算定され（約7千円～数万円）、納付すると自動的に商工会議所の会員になる。通商省に名簿を請求したが、言を左右して出そうとしなかった。

退職した所員の机から2年前の2,300人分の名簿が入ったフロッピーが見つかった。所長の記憶では、事務所の移転通知を出す目的で名簿のデータもらったが、廃棄を指示されて通知も出さなかったという。そのヤミ名簿を基に登録者の業種と民族別のデータベースを作成するが小生の最初の仕事になった。民族区分は氏名の特徴から推定するしかなく、大ざっぱな集計になったが、EUの国情調査レポートや銀行が出す断片的なデータ等をつなぎ合わせると、バヌアツの産業構造が見えてきた。

- * 白人（オーストラリア人、フランス人等）が経営する事業所、ホテル、レストラン、商店など： 500件
- * 中国系、ベトナム系が経営する商店、各種サービス、小ホテル、レストランなど： 800件
- * 先住民の「商業」： 露店（朝市のおばちゃん）土産物の屋台店など： 600件
- * 先住民の「運輸業」： タクシー・ミニバス運転手、渡し舟の船頭（車や舟は賃借）： 300件
- * 先住民の「製造業」： 製パン、製カバ（伝統飲料・後述）： 100件

バヌアツのGDP（国内総生産）約1,730億円の約7割を白人経営のビジネスが占める。オーストラリア、ニュージーランドからの観光客相手の商売がメインで、タックスヘブンの会計事務所と思われる「ファイナンシャルサービス」も多い。5,500件の事業登録の内、何らかの実態があるのが2,300件で、残り3,200件は幽霊会社と考えればつじつまが合う。つまり、バヌアツの数字に表れる経済活動の7割が、人口の1%の白人と国外の白人との間で循環し、中には公表をはばかるものも含まれていることになる。

都市住民の暮らしや仕事を支える商店、各種サービス、中級以下のホテルやレストランの経営が中国系なのは世界共通で、バヌアツではそれにベトナム系が加わり、人口の4%のアジア系移民がGDPの約2割を担っている。

人口の95%（20万）を占める先住民の1000件の事業登録の中で、「会社」と呼べるものは、グラスファイバー製の渡し舟を造る従業員8名の1社だけだった。「商業」は屋台店のおばちゃん、「運輸業」はタクシー運転手（車は中国系業者から賃借）、「製造業」は農家が庭先で作るパンやカバ（伝統飲料）と判明した。彼等が「個人事業主」として事業登録しているのは健気だが、一念発起して「経営研修」を受けに来るとは考え難い。

先進国の経営研修は「市場競争に勝つための組織の効率化」が眼目だが、競争も組織も存在しないバヌアツでは空論になる。貨幣経済が始まった



市街の「よろず商店」は中国系



村のパン屋さん

ばかりのバヌアツでは、「商売とは何か」から説き起こす教科書が必要で、中学2年で受けた「職業」の授業の記憶を呼び覚ましてゼロから書き起こした。試しに受講者を募集してみると、就活中の高卒者から申し込みがあった。講師は自分で務める覚悟だったが、開講直前に元高校教師の女性から申し出があり、教科書を日常語の

ビスラマ語に翻訳して講師を務め、好評だったので定番講座として定着させた。

会議所会員の枠を外せば、公務員や白人企業で働くバヌアツ人も研修の対象になる。所長の了承を得た上で、小集団活動や「ISO9001」を解説する経営管理講座を企画した。小生はこの



入門講座終了式。中央右が講師



経営管理講座

分野の専門家ではないが、会社での経験を基に資料を作って開講したところ、予想以上の反響があった。職場で部下に聞かせたいという出前講座の要請が重なり、2年目の活動の中心になった。任期終り近くになって、移住したばかりのオーストラリア人から講師引き継ぎの申し出があったのは嬉しかった。

こう書くと順調な活動と思われそうだが、「ナイナイ尽くし」のバヌアツでは想定外に直面する。商工会議所に冷房なく、人間はガマンしてもパソコンはダメで、持参した新品パソコンが10ヶ月で頓死。バヌアツにTV・新聞・雑誌なく、郵便配達もない（本局私書箱のみ）。個人でパソコンを持つバヌアツ人なく、受講生募集の手段は置きチラシと、役所・会社にファックスを送りつけて、口コミに期待するしかない。受講料は当日現金徴収するしかなく、商工会議所におカネなく用紙代もままならず、講師料も（小生はタダ）所員の給料も「ある時払い」になる。

更に困ったことがあった。「時間厳守」は、時計を持っているバヌアツ人がいないので大目に見るとして、「約束を守る習慣」がないのは不可解だった。「来週火曜日の10時に」と約束しても来てくれるとは限らず、「今週中にやる」約束もズルズルで、ダメの連絡もなく、約束を破られた側も決して怒らない。ある時、集落のチーフと村人のやりとりを見て「そういうことか！」と思いあたった。集落では今もチーフの采配が全てで、チーフの指図は命がけで遂行するが、個人的に頼まれたことは、断ったら悪いからその場で快諾するのが礼儀で、やるかやらないかは成り行き次第でOKなのだ。自給自足の原始の暮らしでは、「今週中」が「またいつか…」になっても、誰も困らない。約束はあいさつ程度の意味しかなく、その習慣が都市生活でも生きていと知れば、ハラも立たなくなる。

受講生の無断欠席はともかく、講師の無断欠勤はアタマにきた。集まった受講生は不平もなく帰ったが、小生は怒ることにした。バヌアツの経営研修は、講師に「時間を守る、約束を守る」ことの意味を教えることから始まった。

ポートビラの暮らし

ポートビラは近隣のオーストラリア人、ニュージーランド人の手軽な観光地で、白人経営のリゾートやホテルが数多くあり、メインストリートに免税店やレストランが並ぶ。タックスヘブンをがらみの事務所もあり、ポートビラには2千人余りの白人が居住している。彼等の仕事と生活を支える都市インフラ（電気、水道、電話、ネット、銀行、輸入食材店、地ビール、医師など）が、我々のようなボランティア滞在者のライフラインになっている。

ポートビラに住むバヌアツ人の住居は電灯と共同トイレがあれば上等の掘っ立て小屋で、我々は白人用のアパートかホテルに住むしかなく、家賃は高いが、設備が良いわけではない。小生は勤務先に近いホテルの1室（キッチン付き）を長期契約した。単身赴任歴の長い小生は



公設市場 季節のものが安く買える

自炊が苦にならず、昼も家に帰って3食自炊した。野菜や果物は公設市場で産直品を買い、輸入食材は白人用スーパーで手に入る。フランスの伝統を受け継ぐパンは絶品で、美味しい肉屋もある。電気のないバヌアツでは漁業も成り立ち難いが、首都近くでマグロが獲れれば店に並ぶこともある。

職場もホテルもネット環境は電話回線にモデム接続で、通信速度は24kbpsしかなく、エラーも頻発する。メールの送受信は何とかなるが、画像の送受信には「時を超越する無の境地」の精神修養を要する。それでもインターネットの威力は絶大で、日本の留守宅とメールで連絡がとれ、ネット検索で業務に必要な資料も入手できた。TVがないので夜はパソコンをいじるしかなく、持ち帰った仕事やホームページ作りで夜長を過ごす。

路線バスはなく、乗合タクシー（ミニバス）が日常の交通手段で、手を上げると止まり、行き先を告げて運転手がOKすれば乗車する。料金は市内100Vatu（約100円）均一で近郊は交渉次第。先に乗っていた客は5分で着く筈が回り道されて30分かかったりするが、モンクを言う客はいない。道路は植民地時代と米軍時代の遺物で、補修や整備は外国の援助を待つしかなく、地震で壊れた橋は日本が無償援助で架け替えた。市外の道路は米軍が急造した軍用道路だけで、四駆車でないと走れない箇所が多い。

酒類は白人の店で買えるが、バヌアツ人は体質的にアルコール分解酵素がなく、ビール一口でダウンする。付き合いは居酒屋ならぬカバ・バーに行く。カバ（Kava）は胡椒科の植物の根をすり潰した泥状の液体で、飲用すると酩酊に似た状態になる。極めて不味く、一気に呑みして果物ジュースで口をすすぐが、歯医者麻酔のように口中が痺れる。カバの酩酊は強い沈静作用で、飲んでも盛り上がりせず、電気のないカバ・バーの暗闇でボソボソと話してひとときを過ごす。例外的に美味しいのが「噛みカバ」で、神職のオッサンが噛んで吐き出した液体をいただく。刺激なく喉を通して酔い心地も悪くないが、特別のイベントでなければ巡り合えない。



カバ・バー

バヌアツの観光について

日本からバヌアツを訪れる公募ツアーは滅多にない。直行便もなく、オーストラリア、ニュージーランド、ニューカレドニアあるいはフィジーで乗り継ぐが、接続が良くないので、経由地での観光も楽しむ旅程が良いだろう。国内の移動が予定通り進まないことがあるので、余裕のある日程が望ましい。バヌアツの旅行情報は少ないが、ポートビラに日系のホテルがあり、現地ツアーの手配もしてくれる。観光の目玉はダイビングで、サント島に日本人経営のダイビングショップもあり、短期間でライセンスの取得も可能と聞く。泳ぎがダメな小生はもっぱら浅瀬でスノーケリングだったが、それでも熱帯のサンゴ礁を十分に楽しめた。

ポートビラ市内と周辺の観光：共同統治時代に総督邸があったイリキ島、公設市場、民族博物館、大酋長会議場くらいしかないが、海岸の公園で海を眺めたり、街を歩いて民芸品店を覗くだけでも楽しい。屋台店や現地人食堂での食事は体調を崩すことが多く、避けた方が無難。

ポートビラ発の半日、1日ツアーが各種あり、エファテ島北部の原始集落を訪れたり、無人島でのんびり過ごしたりできる。レンタカーはあるが、道路が悪く事故時の救援も困難なので、お薦めできない。



エファテ島北部の集落

タンナ島： ポートビラから国内線で南へ1時間のタンナ島には、原始のバヌアツが色濃く残っている。島内観光は現地のリゾートが手配する四駆車ツアーに参加するしかない。夕方出発のツアーで島南部のヤスール火山を訪れ、8合目で四駆車を降りて20分程登り、標高361mの火口縁で眼下の噴火口から数分毎に噴き上がる溶岩を眺める。翌朝のツアーで森の中の集落を訪れ、原始の暮らしびりと伝統ダンスを見学する。入村料は集落にとって重要な現金収入で、いくつかの集落が回り持ちで観光客を受け入れる。隣りあう集落でも家の造り方や伝統ダンスに違いがあるのが興味深い。原始的で貧しい暮らしびりだが、明るく屈託のない子供たちの笑顔を見れば、自然の恵みと共同体の絆で暮らすバヌアツ人の健全さに感銘を覚える。



ツアーの途中で出会った子供たち。決して金銭をや物をねだらない。



ヤーケル村の伝統ダンス。円陣で地面を強く踏みつけて踊る。

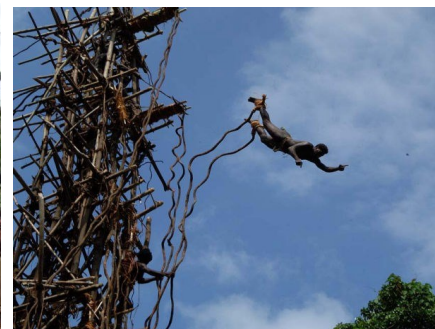
ペンテコスト島： バンジージャンプの元祖とされるナンゴール祭は、成人儀礼と誤って報じられるが、ヤムイモの豊作を祈る伝統行事で、毎年4月下旬～5月上旬に島内の各集落で行われる。その一つが観光客を受け入れ、開催に合わせてポートビラ発の日帰りツアーの募集があり、小型機の臨時便で島を訪れる。見学するにはこの時期に合わせてバヌアツを訪れる必要があるが、悪天候で飛行機が飛ばないこともある。



小型機で草原の滑走路に着陸。



高さ20m超の櫓は毎年新築。集落が総出でジャンパー激励のダンス。



跳躍台は4段。最下段は子供用、最上段は若者頭専用。

バヌアツ滞在中にホームページ「バヌアツ通信」を立ち上げ、体験談やバヌアツに関する情報を発信した。帰国後に「写真で世界を巡る」に統合し、「バヌアツ民話集」の全和訳、「バヌアツ人の戦争体験」の全和訳を追加した。民話には日本の昔話に似たストーリーが多々あり、戦争体験はバヌアツに駐留して日本軍と戦った米軍に接したバヌアツ人古老から聞き取ったレポートで、米軍の行動やバヌアツ人への接し方が窺える。共に興味深い内容なのでぜひご覧いただきたい。「写真で世界を巡る」 <https://withcamera.jp> → 「バヌアツ」

以上